

提 言

過疎地こそ子どもを育てやすく

—縮む被災地, 職, 病院なく人口流出, 小児医療, 保健, 教育を通して地域の存続, 再生支援—

泉 達郎 (国立病院機構七尾病院顧問 / 大分大学名誉教授)

高校卒業後, 三重—三重県立大, 東京—東京女子医大, 東大, 精神神経研究所, NY—Albert Einstein 医大, 大分—大分大学と移動し, 定年退任後, ほぼ50年ぶりに故郷に戻り, 地域の小児科医, 小児神経科医として仕事を継続しています。七尾市, 能登半島, 大伴家持の万葉集にも記載があり, 長谷川等伯生誕の地, 和倉温泉のある街ですが, 少子高齢過疎化の波は大きく, 2007年3月25日能登半島地震によって, 能登半島全体で更に加速されています。これは, 2011年3月11日東日本大震災, 福島原発事故に伴う被災地よりの人口流出が, 従来, 少子高齢過疎化地域であった地域が, 震災, 原発事故により, 更に, 少子高齢過疎化が加速しているのと同様の動きでもあります。現在, 東北地方では港湾や堤防の整備, 市街地域の地上げ工事が進められていますが, 土地の基盤整備工事が完了しても, 人口流出に伴い, 地域の産業, 事業所, 商店の減少も進行しており, 地域の再生, 存続は危うい状況になっているように思います。



故郷に戻り, その中で生活をする, 商店街の衰退, 特に, 地元造酒屋の減少, 小中学校の廃校と統合, 身近にあった医院の減少と廃院跡は, 故郷の衰退を痛感させられます。地元商工業の衰退には中央資本による大企業との競争原理もありますが, 地域の人口減少自体が, 地元企業の後継者や作業員, 従業員の不足となり, 一次産業である農林漁業の衰退の要因ともなっています。必ずしも, “職” がなくて過疎化が進行している訳ではないように思います。

当七尾病院では, 長年, 常勤小児科, 小児神経専門医は不在で, 七尾だけでなく, 能登全体で, 小児科医の不足は深刻です。重症心身障害児(者)医療や小児神経, 発達障害児医療の低下は, 保健活動にも影響を及ぼし, “子どもを産み育てやすい街”の形成に大きな影響を及ぼしているように思います。生まれた子どもが“知的障害や運動障害, 痙攣”を呈すると, 治療, リハビリのため医療施設の揃う地域へ, 家族全体で移動していくことが少なくないことに気づかされます。過疎地域が“本当に, より子どもを産み育てやすい街”, “若い夫婦が住み生活できる街”であるという認識と安心感を形成するためには, 小児医療, 保健活動の整備と時間外診療, 発達障害児医療とその健診, 支援が必要であり, これらの活動により人口流出の抑制, 合計特殊出生率の上昇に繋がると考えます。

各地方, 地域には歴史と文化があり, 安易な小中学校の廃校と統合は地域の活動性を低下させ, 人口流出に繋がります。地域の学校教育, 小児医療と保健活動は地域の最も基本的な“infrastructures”であり, その力を“もう一度”¹⁻³⁾示す機会でもあると考えています。

文 献

- 1) 泉 達郎, 他. 小児科医のいない街: 少子, 高齢, 過疎化と小児医療. 小児保健研究 2005; 64: 441-446.
- 2) 是松聖悟, 他. 地方における小児, 周産期医療を担う医師確保対策調査. 日児誌 2009; 113: 1587-1592.
- 3) 泉 達郎, 他. “小児科医のいない街”から“子どもを産み育てやすい街”への転換—過疎地域における小児医療・保健の役割と評価—. 小児保健研究 2011; 70 (記念号): 88-90.